シリーズ
かほく市の文化財 No.30

地域 編　かほく市に残る江戸時代の面影（宇ノ気編１）

かほく市の道を歩くと、これは何だろう？というものや、かつての道の名残が残る所がちらほらとみることができます。これらの多くは、およそ江戸時代頃の能登街道などの名残であり、かつての町の姿の面影を示すものでもあります。今回から宇ノ気地域を複数に分けて、少しずつ紹介します。

宇ノ気地域に残る街道の名残をみると、街道筋の分岐点や街道入口などの標石として江戸時代に置かれた標石である「道標」があり、「宇野気道標」や「内日角道標」があります。このうち、「宇野気道標」はそもそも内日角へ向かう道と能登街道に接続した地点にあったといわれ、今は宇野気神社境内に移されました。また、「内日角道標」は舟着場へ向かう道と大崎へ向かう道、街道がある「宇野気新村」へ向かう道が交差した内日角の三叉路にありましたが、模造の木柱に置き換え、市が現物の標石を保管しています。休憩する場所としては、狩鹿野にある大物主神社境内に今も「イリコの宮井戸」の跡があり、能登街道を行く人々がこの井戸で喉を潤したといわれています。他にも、「宇野気新村」には茶屋があることや弁当を茶屋で食べたなどの記述が、日記や紀行文など複数の文書に出てきます。

宇ノ気周辺と街道